

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

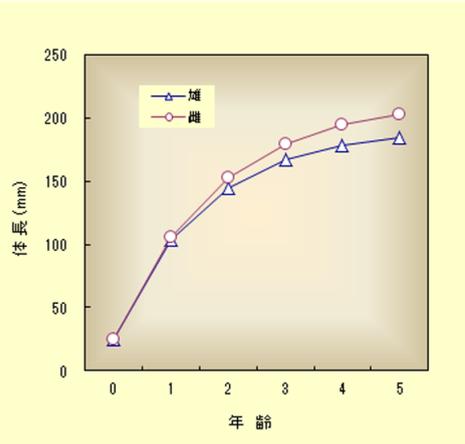
系群名 日本海西部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 5歳(年齢は、ふ化した年を基準に暦年で示す)
成熟開始年齢: 雄:1歳(100%)、雌:2歳(100%)
産卵期・産卵場: 12月の極短い一時期、沿岸の藻場、能登半島以西にはまとまった産卵場がない
索餌期・索餌場: 未成魚期以降の分布と回遊に関する知見は少ない
食性: 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者: マダラ・アカガレイによって捕食されるが、詳細は不明

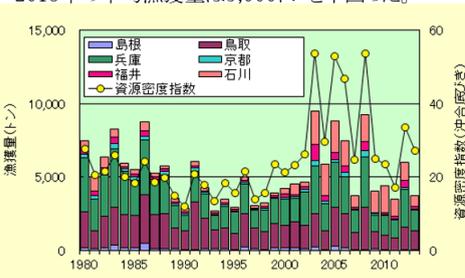
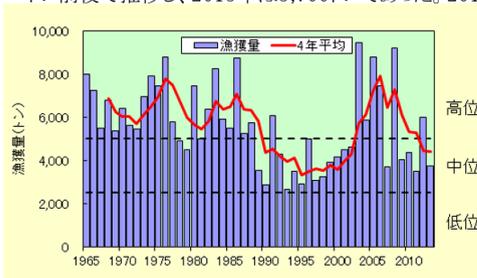


漁業の特徴

兵庫県と鳥取県では沖合底びき網(1そうびき)、京都府以北および島根県では小型底びき網によって主に漁獲され、兵庫県と鳥取県および石川県の水揚げが多い。漁期の中心は底びき網のカニ漁終了後の3～5月である。休漁明けの9～10月にも漁獲はあるものの春よりも少なく、11～1月はほぼ漁獲されていない。

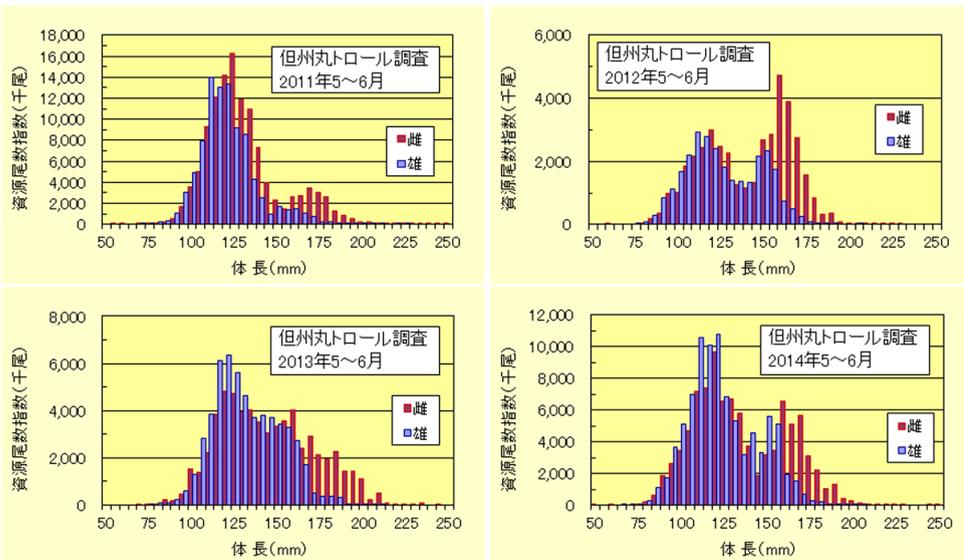
漁獲の動向

ハタハタ日本海西部の漁獲量は、ごく数年での大幅な変動を伴いつつ、長期的にも大きく変動してきた。2000年以降は増加し、2003年には過去最高(9,500トン)となった。その後も半減・倍増を繰り返していたが、2009年以降は4,000トン前後で推移し、2013年は3,700トンであった。2010～2013年の平均漁獲量は5,000トンを下回った。



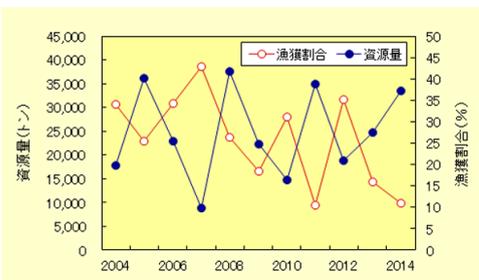
資源評価法

日本海西部における漁獲量の過去50年の推移から、長期的資源変動ならびに資源水準を判断した。動向については日本海ズワイガニ等底魚資源調査(以下、トロール調査と呼ぶ)を5～6月に実施して面積密度法により2004年以降の現存量を算出し、それに基づき推定した資源量から資源動向を判断するとともに、2004年以降の漁獲割合とF値などを把握した。



資源状態

水準は、漁獲量の4年平均の最高(7500トン)~0トン(高)を3等分し、5000トン(高・中)、2500トン(中・低)を境とした。2010、2011年の漁獲量は4,000トン前後であった。2012年は5,980トン、2013年は3,735トンとなった。2010~2013年の4年平均は4,393トンであり、高・中位の基準を下回っており、水準は中位と判断した。動向は、トロール調査結果に基づく資源量の直近5年(2010~2014年)の推移より判断した。資源量は、2010年以降も半減・倍増し、2014年は多い年となった。しかし、2014年の資源量は3年前と同等であったことから、動向は横ばいと判断した。

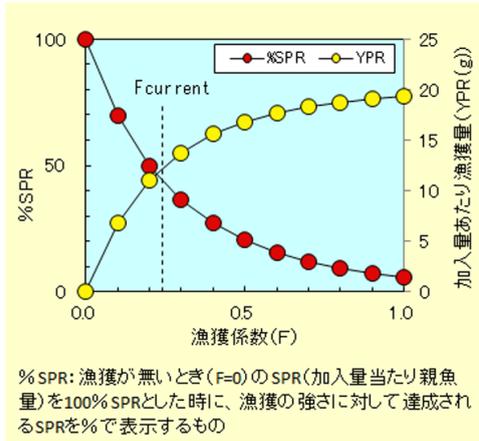
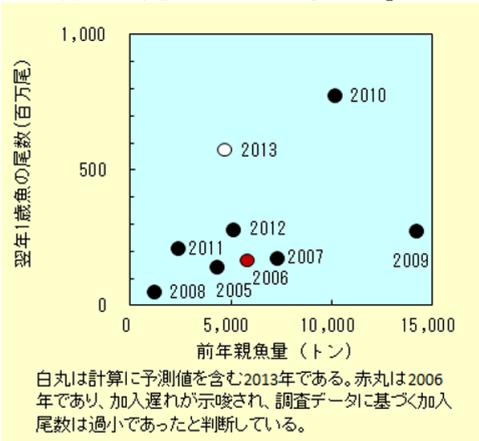


管理方策

トロール調査による年齢別漁獲尾数に基づくと、2015年は2歳魚が比較的多いことから、現状の漁獲圧でも資源量と親魚量は増加することが予想される。現状の漁獲圧を維持しながら、資源を有効利用するべきである。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	79百トン	1.0・Fcurrent	0.24	21%
ABCtarget	65百トン	0.8・1.0・Fcurrent	0.19	18%

- ABCの値は十の位を四捨五入したもの
- ABC算定の規則の1-3)-(2)に基づき、Flimitは現状のF(Fcurrent)に β_1 を乗じることとし、 β_1 を1.0とした
- 不確実性を考慮して0.8を乗じた値をFtargetとした



資源評価のまとめ

- 2009年以降の漁獲量は、2012年を除き、いずれも4,000トン前後、2013年は3,700トンであった
- 漁獲量の直近4年平均は5,000トンを下回っており、中位水準
- トロール調査に基づく資源量は、倍増半減してまた増加し、2014年は3年前と同等であったことから、動向は横ばい

管理方策のまとめ

- 2015年は2歳魚が比較的多いと推定され、現状の漁獲圧でも資源量と親魚量は増加すると予想される
- 現状の漁獲圧を維持しながら、資源を有効利用すべき
- 2009年以降、各府県の自主的な取り組みにより、安価な1歳魚の水揚げが控えられている可能性がある
- 今後も網目拡大の取り組みを続け、経済効率の高い2歳魚主体に漁獲することが重要である

執筆: 藤原邦浩・上田祐司・松倉隆一・山本岳男・山田達哉

資源評価は毎年更新されます。